

# 松山鏡

(まつやまかがみ)

## 【主な登場人物】

正助 正助の女房 尼さん 殿様 名主

## 【事の成り行き】

時は江戸時代、鏡を誰も見たことのない松山村で繰り広げられる物語です。

正助という四十二歳の男が主人公で、正助は両親が死んで十八年間、

ずっと墓参りを欠かしたことがありません。

これが殿様の目に留まり、孝心あつい者であるというので、

ほうびをちょうだいすることになりました。

正助は着物も田畑もお金もいない、

おとつあまに一目会わせてほしいと、お願いしました。

殿様は正助と父親が瓜二つであることを名主に確かめると、

ほうびとして鏡を正助にわたしました。

鏡を知らない正助、映っている自分の顔を見て、

おやじが映っていると勘違い、大感激しました。

正助は女房にも秘密にして、朝夕、鏡を見て、

おとつあまに、あいさつしていました。

亭主の様子がどうもおかしいと、気づいた女房は、

亭主の留守に鏡を見てしまいました。

女房も鏡を見たことがないので、映った自分の顔を夫の女と勘違い、

夫婦げんかになってしまいました。

ちょうど表を通りかかった尼さんが、驚いて仲裁に入り、

尼さんがその女に会いましょうと言って鏡をのぞきました。

鏡を見た尼さんは「おまえらがあんまりえらいけんかをしたので、

中の女が、面目無いと言うて坊主になった」と言ったそうです。



三味線弾き語り  
西木和子(昭和44年卒)